

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名: ショソン エリカ パウラ サン ペドロ (Erica Paula San Pedro Sioson)

ショソン エリカ パウラ サン ペドロ (Erica Paula San Pedro Sioson) 氏の論文、“The Integration of Foreign Residents into the Japanese Society: A Case Study on the Filipino Residents in Nagoya City (在留外国人の日本社会への統合化: 名古屋市の在日フィリピン人の事例研究)” は、質的調査と計量的分析を合わせた混合研究手法に基づく、在日フィリピン人が最も多い自治体である名古屋市における人々の日本社会への統合化の実態を解明する動態的社会研究である。

本論文は3部、全9章で構成されている。本論文の目的は名古屋市の在日フィリピン人が日本社会にどのように統合化されているかを探ることである。そのため、統合化をどのように量るか(第1部)、統合化の結果とは何か(第2部)、どのような統合化のパターンが見出されるのか(第3部)、の3部に分けて考察が進められる。第1部は2章によって構成され、序論及び先行研究の概説(第1章)、理論的枠組み、リサーチクエスチョン、方法論の説明(第2章)が続く。第1章では、移民の適応問題に関わる先行研究の学說的潮流が分析される。同化主義論に続き、多文化主義論が登場するが、やがて学問、政策の双方において統合化論へと関心が向けられるようになった経緯が緻密な文献研究に基づき説明される。ショソン氏は移民の分析社会学的研究の先駆者、ドイツのハートムート・エッサー(Hartmut Esser)の分析枠組みを援用し、移民の統合化過程を構造的、文化的、相互作用のそしてアイデンティティの4次元から捉える枠組み(以下、統合化過程4次元分析法とする)を設定する。第2章では、第1章で設けられた統合化過程4次元分析法を踏まえた混合研究法の手順が説明される。混合研究法の手順に応じて、第1段階でベースライン調査(質的)が実施される。第2段階では計量的調査のための質問票を用いたサーベイの準備、プリテストが行われ、第3段階で本格的サーベイが実施された。質問票を用いたサーベイでは、8大項目(人口学的・移住前後・雇用と労働・住居と健康・言葉の問題・社会参加・トランスナショナル及び民族的紐帯・今後の展望)に関わる質問が設定され、対象者459人から回答が寄せられた。この数字は名古屋市の在日フィリピン人(2017年6月末現在、8,794名)の5%以上を占める。

第2部は日本への移民(第3章)、在日フィリピン人(第4章)、名古屋市の現状(第5章)によって構成される。第3章では日本への外国人移民に関わる概要が説明される。2015年時点で、日本では2,200万人の外国人が生活しているが、全人口比での受入割合はOECD諸国の中で底辺をゆく。多くの外国人が仕事を求めて来日している一方、政府は積極的な移民政策を打ち出すことなく、自治体や市民団体に現場対応を任せている現状が示される。第4章では2016年時点で24万人いるとされる在日フィリピン人の現状について、労働力の供給と需要の両側面から移民の実態に関わる分析がなされる。1970年代以降フィリピンの人々の多くがアメリカ、日本そして中東諸国に出稼ぎにいく労働供給増の傾向が顕著となり、一方で1980年代以降の好景気を反映して、日本の労働市場は多くのフィリピン人労働者を受け入れる素地が形成されたとする。来日フィリピン人の多くは、興業ビザで来る、技術のない、「ジャパゆきさん」と呼ばれてきた若いフィリピン女性たちであった。第5章では、名古屋市の移民受け入れ態勢と現状に関し、統合化過程4次元分析法に沿って考察される。その結果、構造的次元において自治体の政策はかなり効果をもたらしているものの、文化的・相互作用次元においては、言葉の壁などが妨げとなっており、それ故に人々のアイデンティティの次元に至っては関係するアクターの漸次的対策に効果を期待するしかない現状が確認された。

第3部は、サーベイ回答(第6章)、回答から見た統合化の結果(第7章)、統合化の諸次元とパターン(第8章)、結論(第9章)により構成されている。第6章では、寄せられた459件のサーベイ回答の結果が示される。解析の結果、多くの回答者が共有する特徴とは、経済的

な理由で最初は興業ビザを取得して来日し、10年前後の期間を経て、現在は永住権や長期滞在資格を保持している現状であった。第7章では統合化過程4次元分析法を用いた考察が行われる。回答者たちの多くは、構造的次元では様々な雇用や公共サービスを享受する状況にあるが、文化的次元では十分ではない日本語能力が妨げとなり、滞在期間を限定したり、フィリピン人同士の絆をむしろ強めたりする傾向にあり、統合化は広がりを見せない。更に相互作用次元において個人的な相互作用はかなり密度が濃いものの、社会的には希薄である。最後にアイデンティティの次元では、個々の帰属意識のありようは、それぞれの個人的な略歴や移住経緯により異なり、統合化の一定した状況は見出すことができない。第8章では、統合化過程4次元分析法に基づき、傾向性を計る複合指標が抽出され、統合化のパターンを可視化する作業が丹念に行われる。ショソン氏は統合化の4パターンを以下のように示す。1) 非統合型:すべての次元において統合化の度合いが低い。2) 経済的不活性型:文化・相互作用・アイデンティティの3次元で統合化の度合いが進んでいる一方、構造的には全く進んでいない。3) 平衡型:最多数層で、構造的次元では統合化が進んでいるが、他の3次元は平均水準である。4) 直線型:2番目に多い層で、すべての次元において高い統合化の度合いが進んでいた。

第9章では、前8章の丁寧な取りまとめの後、結論として、名古屋市の在日フィリピン人の統合化は不均等に進んでいることをショソン氏は指摘する。統合化の度合いもパターンも一様でなく、不透明である。その背景には言葉と技能の問題、その問題ゆえに起こる社会的相互作用の難しさがあると結論付ける。そうした困難な状況を改善するために、様々なアクターによる働きかけが必要であることを具体的に提言する。最後に、課題としては移民の言葉・技能を高める制度的工夫、社会的相互作用を促進する交流、多文化教育の3つが重要であると指摘する。ただし、本論の研究作業を通して、全てが解明されたわけではなく、混合研究方法をもってしても、在日フィリピン人が統合化の先に何を望んでいるか、具体的な見通しがあるわけではない、と慎重な分析を怠らない。

本論文は、以下の四点において、人間の安全保障研究に重大な貢献をもたらした。1) 今日の世界で増加し続ける移民とその問題につき、研究と実践の双方から丹念に調べ上げ、統合化という最先端の課題に焦点を当て、理論的かつ具体的な考察を行った点。2) 名古屋市の在日フィリピン人とそれを取り巻く現場に寄り添い、関係者の視座から統合化の実態を明らかにし、政策提言まで完遂した点。3) 在日フィリピン人の最多数が居住する名古屋市において対象者へのサーベイを行い、人口の約5%にあたる459人から有効な回答を得て分析を行っている点。4) 混合研究方法による移民研究の方法論的可能性を示した点。

審査では、量的・質的データの取り扱いと提示法、及びデータ解析につき、やや未熟な点があったことが指摘された。また日本に在住する非英語圏外国人の状況や他国における移民の状況、更には史的観点からのフィリピン移民の動態に関わる背景説明の不足も指摘された。加えて日本における移民政策の説明にも不十分さが感じられた点も指摘された。最後に移民のトランスナショナルな現状を踏まえた考察も課題として残された。とはいえ、こうした点が本論文の持つ高い価値をいささかも損なうものではないことは、審査委員全員が認めるところであった。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士(国際貢献)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。